

佐藤鐵太郎の国防思想の形成

——『帝国国防論』（1902年）をめぐって——

張 万 拳

The Form of Sato Tetsutaro's National Defense Theory

—*The Theory of Empire's National Defense*—

Wanju ZHANG

As a military theorist, Sato Tetsutaro played a key role in the history of the imperial Japanese navy and was known by many as “the Mahan of Japan”. Sato joined The First Sino-Japanese War (25 July 1894-17 April 1895) and rendered meritorious military service in the war. After that, he was sent to study abroad in British and the United States for two years and a half. When coming back to Japan, he was arranged to work in The Naval War College as a teacher. As soon as he start to work, he wrote out *The Theory of Empire's National Defense*. This book marked the form of of Sato Tetsutaro's national defense theory. First of all, this paper discusses the process that why and how Sato studied abroad. Then through the analysis of the content of *The Theory of Empire's National Defense*, I try to find out what kind of national defense theory Sato was appealing for.

Keywords: Sato Tetsutaro national defense theory *The Theory of Empire's National Defense*.

はじめに

日清戦争で戦功をたてた佐藤は、その後、赤城分隊長、浪速航海長兼分隊長を務めてから海軍省軍務局に入った。軍務局での経歴は、佐藤が海外留学と西洋海防論を調査できる重要なきっかけである。本稿では、『帝国国防論』の時代背景として、日清戦後の陸海軍論争を中心に考察して、佐藤が、イギリスとアメリカに駐在した時の西洋海防論の調査過程を検討して、『帝国国防論』の執筆と完成に至る経緯を説明してみたい。

一、時代背景

1、佐藤鐵太郎という人物

佐藤鐵太郎の海軍国防思想を検討する前に、彼の略歴を簡単にまとめておく¹⁾。佐藤は慶応2（1866）年7月山形県鶴岡藩士の長男として生まれた。明治20（1887）年に海軍兵学校を卒業。明治22（1889）年に清国と朝鮮へ調査に出かけている間に『国防私説』の執筆を始めた。明治25（1892）年に海軍大学校を第一等の好成績で卒業した。佐藤の初陣は日清戦争で、砲艦「赤城」の航海長として活躍した。明治29（1896）年に海軍省軍務局第一課に抜擢され、国防研究に熱意をかけた佐藤は、出羽重遠軍事課長と山本権兵衛軍務局長に目をかけられた。明治32（1899）年5月に英国駐在、明治34（1901）年1月に米国駐在員としておよそ二年半の間、留学生生活を送った。帰国した翌年の1月に佐藤は、海軍大学校教官となり、11月には彼の留学中の成果と言われる『帝国国防論』が出版され、山本権兵衛海相の手を経て明治天皇に捧げられた。日本海海戦で戦功を挙げた佐藤は、日露戦争の経験を生かして『帝国国防論』を補足し、海軍大学校での講義を整理して、明治41（1908）年9月に『帝国国防史論』を完成させた。これについては、佐藤の海軍国防思想が成熟期に入ったと考えられている。佐藤は、自強自衛と海主陸従の国防理論を唱え、同時期における日本の対外拡張推進のスローガンを強く批判していた。また佐藤は、マハンの海権論を生かして日本独特の地理環境と結びつけ、日本海軍独自の国防論を完成し、甚大な影響を海軍に与えた²⁾。しかしながら、佐藤のこのような「満蒙拡張反対」の議論は、戦前期の日本においては、合理的な国家戦略論として受け入れられることはなかった³⁾。その後、戦艦艦長・海軍大学校教頭を経て明治45（1912）年には少将に昇進し、軍令部次長・海軍大学校校長となり、大正5（1916）年には中将の地位に就いた。大正12（1923）年、当時の加藤友三郎海相とそりが合わなかったため、予備役に編入されてしまった。その後も国防理論の研究を続け、昭和5（1930）年に『国防新論』を完成させた。昭和9（1934）年には貴族院議員となり、17（1942）年3月4日に死去した。二日後の、位階追陞の件⁴⁾での佐藤の生涯に対する評価からみれば、彼の海軍国防理論は、近代日本の国防思想においてどのように位置づけられたのかは明白であろう。

若シ夫レ戦史ノ研鑽ニ至リテハ、篤学熱誠慧眼紙背ニ徹シテ、他人ノ追従ヲ許サザル本官独特ノ壇場ト為ス。其ノ著ス所ニ帝国国防史論アリ、海洋国家国防ノ指鍼トシテ、我国唯一無二ノモノニシテ、後進之ガ為ニ啓発セラレ、今次大東亜戦争ニ於ケル赫々タル戦果モ、本論ニ負ヒ処甚大ナルモノアリ。（句読点は筆者）

1) 海軍歴史保存会編『日本海軍史』第九卷（将官履歴 上）東京：第一法規出版、1995年、243-244頁。石川泰志前掲『佐藤鐵太郎海軍中将伝』附録佐藤鐵太郎年譜、540-555頁。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A11115209900、叙位裁可書 昭和十七年 叙位卷二十（国立公文書館）。

2) 波多野澄雄「日本海軍と『南進』——その政策と理論の史的展開」（清水元編『両大戦間日本・東南アジア関係の諸相』「アジア経済研究所、1986年」）209頁。

3) 五百旗部真『戦後日本外交史』有斐閣、1999年初版、12頁。

4) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A11115209900、叙位裁可書 昭和十七年 叙位卷二十（国立公文書館）。

もちろん、このような賞賛を佐藤に与えた時の国内外の背景も注目されるべきである。真珠湾奇襲後の日本海軍は、緒戦期の順調な戦いによって大勝利の戦果を獲得したため、海軍理論家としての佐藤が、このような褒め言葉で高く評価されたのは当然のことであろう。

2、陸海論争

先ずここで、佐藤が『帝国国防論』を執筆した時代背景を簡単に纏めておきたい。

明治の建軍以来、日本の海陸軍は、日本の国防における各自の重要性と地位をめぐって、争いを次第に激しくしていった。周知のように、陸海軍の間でのこのような対立と論争は、日本の近代史を貫いて敗戦まで続いていたと考えられている。とくに、国防計画をめぐる陸海軍の二元化は、陸海軍の軍備拡大競争にともなって軍事予算の争奪戦を激化させ、この対立が昭和20（1945）年の敗戦まで日本の政治・軍事・外交を大きく左右することになる⁵⁾。本稿で論じる佐藤鐵太郎の国防思想も、このような状況のなかで形成されたものである。このために、佐藤の『帝国国防論』をよく理解しようとするれば、まず同時期の陸海軍の対立と論争の背景を簡単に整理しておく必要がある。

明治11（1878）年に、天皇直属の軍令機関として参謀本部が設置された。参謀本部長は「帷幕ノ機務ニ参画スルヲ司ル」とされ、陸海軍の幕僚長として軍令を一元的に掌握していた⁶⁾。したがって、日本陸海軍の早期における対立の焦点は、海軍がその発展にともなって、海軍軍令機関の独立の試みにあった。日清戦争が開始される前の明治26（1893）年1月、西郷縦道海軍大臣は、「海軍の軍令機関独立を意味する」海軍参謀本部条例案を内閣に提出した。この条例案は、明治24（1891）年6月に海軍大臣官房主事の職についた山本権兵衛大佐の主導による海軍諸制度変革の一環であった。当然、この条例案は陸軍から激しい反発を招いた⁷⁾。これによって陸海軍の対立が表面化した。結局、天皇は、有栖川宮参謀総長、大山巖陸相、児玉源太郎陸軍次官、西郷縦道海相、伊東祐亨海軍次官、川上操六参謀次長、山県有朋大将に協議を命じた⁸⁾。その協議の結果、海軍軍令部の成立が認められ、海軍軍令機関の独立が実現した。しかし、これと同時に、戦時大本営条例が明治26（1893）年5月に制定され、その第二条は「大本営に在て帷幄の機密に参与し帝国陸海軍の大作戦を計画するは参謀総長の任とす」と規定した。すなわち、陸海軍の戦時統帥を陸軍の参謀総長のもとに一元化するという陸軍の主張を満足させるものであった⁹⁾。つまり、海軍は平時に軍令機関独立を実現し得るが、戦時においては、相変わらず陸軍参謀本部の下に従属しなければならないということの意味した。

このように、日清戦争では、陸軍主導の戦時大本営による一元的な軍令指揮の下で、対清作戦が遂行された¹⁰⁾。大陸侵攻計画の中で、上陸作戦は非常に重要な一環として、制海権の獲得には海軍に頼らなければならないことは否定できない事実である。黄海海戦などの対清作戦は、海軍の地位をすごく高めた。

5) 大江志乃夫『統帥権』日本評論社、1983年、61-62頁。

6) 黒野耐『帝国国防方針の研究——陸海軍国防思想の展開と特徴』総和社、2000年、60頁。

7) 大江志乃夫 前掲『統帥権』、42頁。

8) 黒野耐 前掲『帝国国防方針の研究——陸海軍国防思想の展開と特徴』、64頁。

9) 大江志乃夫 前掲『統帥権』、43頁。

10) 黒野耐 前掲『帝国国防方針の研究——陸海軍国防思想の展開と特徴』、65頁。

さらに、日清戦争後、海軍は陸主海従の現状に不満であり、海軍を国防の根幹にすべきだと提唱するようになった。その代表人物は山本権兵衛である。

山本は明治31（1898）年11月に海相に就任してから、直ちに国防政策を従来の「陸主海従」から「海主陸従」に転換することを企て、海軍法案を帝国議会に提出しようとした¹¹⁾。この法案の趣意は次のように述べられている¹²⁾。

廿七八年戦役後我國民ノ海軍ヲ重視視スルニ至レル事ハ事実ナリ。然レドモ此思想ハ何時マデ継続スルヤ知ルベカラズ……故ニ今我國民ノ海軍ヲ思フ事未ダ衰ヘザル時ニ法律ヲ以テ将来ノ国防方針ニハ海軍ヲ第一トナストノ事ヲ一定シ、如何ナル政変幾回ノ内閣交渉アルモ容易ニ此国是ヲ変更スル事ヲ得ザラシムル事ハ最緊要ナルベシ、トノ感覺ハ本案起草ノ第一原因ナリ。

山本海相の「海主陸従」という海軍法案は、不明の理由で結局、議会へ未提出に終わった¹³⁾。

そして、明治32（1899）年1月、山本海相は戦時大本営条例の改正を提議した。条例第二条の「大本営に在て帷幄の機密に参与し帝国陸海軍の大作戦を計画するは参謀総長の任とす」の「参謀総長」を「特命を受けたる将官」に改正しようという案であった。これは、陸海軍の完全平等を実現することを目的とした案である¹⁴⁾。海軍側の改正案に対する陸軍側の全面的な反対論によって、「本格的な陸主海主論争の火蓋が切って落とされた」¹⁵⁾。さらに、成熟した海軍国防理論を通して「海主陸従」を宣伝するために、山本は、専門的に西洋の海洋理論を生かして、日本なりの国防理論を作成できる人材が必要であると感じた。山本のこのような考えは、後日、佐藤鐵太郎が国防研究のためにイギリスへ留学する重要なきっかけだったに間違いない。以上のように、佐藤が海軍理論を研究する時代背景を紹介した。

二、西洋留学

さて、以上の背景の紹介を踏まえて、ここで佐藤の留学を考察してみたい。当時の西洋における先進的な海防思想をよく学んで理解することがなければ、日本独自の海防思想ができあがらないというのは、当時の一般的な認識であった。佐藤も日清戦争後、イギリス海軍の歴史の校閲作業に従事して、徐々に国防問題における戦史研究の重要性と必要性を悟り始め、コロム¹⁶⁾ 中将とマハン大佐の著述を愛読するようになった¹⁷⁾。しかしながら、単にこれらの著述を読むだけで戦史研究はできない。したがって、佐藤

11) 麻田貞雄『両大戦間の日米関係——海軍と政策決定過程』東京大学出版会、1993年、31頁。

12) 角田順『満州問題と国防方針——明治後期における国防環境の変動』原書房、1967年、648頁。

13) 黒野耐 前掲『帝国国防方針の研究——陸海軍国防思想の展開と特徴』、68頁。

14) 大江志乃夫 前掲『統帥権』62-63頁。

15) 黒野耐 前掲『帝国国防方針の研究——陸海軍国防思想の展開と特徴』、68頁。

16) Colomb, Philip Howard (1831-1899) : イギリスの海軍軍人、歴史家。1892年海軍中将。主著『海戦論』*Naval Warfare* (1891)。

17) 佐藤鐵太郎『帝国国防史論・補修』東京印刷株式会社、1910年、5頁。

は、西洋へ赴いて専門知識の勉強と実地調査などの必要があると強く感じた。

そして、佐藤が海外へ留学する機会を得たのは、彼の理論研究の才能が目上の人に認められたからである。日清戦争後、佐藤は赤城艦分隊長、横須賀鎮守府海兵団分隊長、浪速航海長兼分隊長を歴任したことがある¹⁸⁾。そして、明治29（1896）年6月5日に浪速航海長であった佐藤は、突然に、「当時俊才の登竜門とも称すべき海軍省軍務局」の一課の課僚として抜擢された。佐藤の回想では、この抜擢は、当時、「飛ぶ鳥をも落とすと称せられた山本権兵衛軍務局長」の下に奉職していた出羽重遠軍事課長の内命によったものである。その由来は、かつて赤城艦在職中の佐藤は、『国防私説』¹⁹⁾を出羽艦長の御覧に供したことがあるからだ。そのため、出羽軍事課長は、『国防私説』に掲載した佐藤の国防意見を実行させるために佐藤を海軍軍務局に抜擢した。佐藤は、出羽軍事課長の部下に属することになり、「心中飛び立つばかりに喜んだ」という²⁰⁾。その後、軍務局で学んだ佐藤の国防研究にかけた熱意と努力は、山本権兵衛軍務局長の眼にとまった²¹⁾。

前述したように、山本は、海相に就任してから提出した海軍法案、戦時大本営条例の改正案をうまく実現できなかった。しかし、山本の「陸主海従」の現状を「海主陸従」に変えようとする意欲は衰えず、かえってもっと強くなっていた。さらに、山本は、国防の理義を闡明するために、「英国は地形上日本国に類似したる島帝国なれば国防の経営も稍々之が軌を執るの必要もあるべし」²²⁾という観念によって、軍務局員海軍少佐佐藤鐵太郎を明治32（1899）年5月にイギリスに派遣して国防論の研究に従事させた。

このように、佐藤は山本海相から直接内命をうけて、「海主陸従」の国策を根拠づけるための学問的裏付けを作り上げようとする目的をもって、駐在員としてイギリスへ赴いた。ロンドンに着いた後、英語が上達しないと研究に専心できないと思った佐藤は、当地の日本人サークルから離れて、東海岸シャーネスの町に引きこもり、イギリス海軍史の研究に心魂を打ち込んだ²³⁾。そして明治33（1900）年3月、佐藤はかねてから会いたいと思っていた秋山真之にロンドンで会って、二人は互いに留学体験と海防研究をめぐって懇談した。このことによって島田謹二氏が整理した秋山真之の関連資料を通じて、佐藤のイギリスでの留生活や研究活動の一端をうかがうことができる。アメリカ留学中の秋山真之は、当時アメリカの有力な海防理論家のマハン大佐に親しく接して、アメリカ海軍の兵学をよく勉強したことがある。佐藤も、外国駐在の後半期はイギリスからアメリカに移る予定であった。使命を帯びた専門の研究をもっとうまく進めるため、佐藤はアメリカでマハンにじきじきに学ぼうとするつもりであった。したがって、ロンドンに来た秋山真之から予備知識を仕入れておきたいと願ったのである。以下に挙げる当時の二人の懇談を通じて、佐藤の研究理念の源、初期の煩悶、道筋の変換、研究方針の確定などの研究

18) 海軍歴史保存会編『日本海軍史』第九卷（将官履歴 上）第一法規出版、1995年、243頁。

19) 『国防私説』は佐藤鐵太郎が明治23（1890）年に執筆して、その後二、三回修正を加えて明治25（1892）年に完成し、日本国防における陸軍より海軍の重要性を強調する論説である。これは、佐藤の国防理論の処女作である。

20) 佐藤鐵太郎『国難に叫ぶ』民友社、1932年、51-52頁。

21) 石川泰志『佐藤鐵太郎海軍中将伝』原書房、2000年、101頁。

22) 海軍大臣官房『山本権兵衛と海軍』原書房、1966年、132-133頁。

23) 島田謹二『ロシア戦争前夜の秋山真之 [1900年2月-1902年7月] ——明治期日本人の一肖像』朝日新聞社、1990年、82頁。

過程を理解することができるだろう²⁴⁾。

佐藤は秋山に対して、先ず地理的環境から出発して島国日本の国防を論じた。

日本は島国である。敵を本土に上陸させてはならぬ。それを国策の中心とすることがぜったいに大切だ。陸上で迎え撃つのは、愚かもはなはだしい。海上で敵を叩きつけて、一歩たりとも陸にあがらせぬこと。——そのためにはオランダ戦争当時のイギリスの対策から、万事が割り出される。つまりヨーロッパ大陸に対するイギリスの地形と、アジア大陸に対する日本のそれと、両者はそっくり同じである。地形上同じなら、国防も同じ結論になる。日本としては海軍をさかんにして、仮想敵の進攻を海上で迎え撃ち、海上で徹底的に叩きつけること。それ以外に策は成り立たない。

当時の大英帝国の繁栄とその海軍の強さに憧れながら、佐藤はイギリスによく似ている地理環境としての島国日本もイギリスと同じように、海軍を国防の中心に置いて敵を海上で迎撃すべきだと主張した。実証的な根拠といえば、オランダと長期の戦争を起こすことになったイギリスの状況と、その戦争の結果を例として分析し、島国にとっては、向こう側の大陸への余計な領土獲得をめぐる欲望を抑止しながら、自国の地理的環境に立った国防政策が最も適切な戦略であるという教訓が生まれたことであろう。秋山は、佐藤のこのような思想が、コロム中将から得たヒントであると考えていた。

次に、佐藤は自己の研究計画と悩みを秋山に吐露した。

僕はね、年代的に研究をしてみたのだな。つまり海防戦に関する歴史を全部読んでやろうと思ったのだ。思えばわれながらたいした野心でしたよ。ところが、それでゆくと範囲がひろがって、頭がこんがらかってしまう。最初の史例を調べてから第二例、第三例に移って、さてはじめの第一例にもどると、なんだかその正体がぼやけてよくわからん。なんとかこじつけて意味を取り出そうとするけれど、頭がこんがらかるだけでした。そこで第四例、第五例と進んでみるが、そうしてみても、うるところはひとつもない。まるでえたいのしれない野っ原を、あっちをうろうろ、こっちをうろうろする気持ちさ。なんとかして戦訓を引っ張り出そうと、のみとりまなこになっても、全然出来きやしない。これには弱ったね。

秋山も佐藤の悩みをよく理解し、「留学の初期はみんなそうじゃないですか。何かまとまった研究をやろうとすると、読むものばかり多くて、……そこから引き出せるものはこれといって何も出てこない」と同感しながら佐藤に言った。正しい研究方法をまだ身につけていない段階の佐藤が、範囲が広い海防戦の本を読むだけで、一定の水準に達する研究を完成させることはできないと語った。この難題の解決について、佐藤は次のように述べている。

僕は戦史を漁るだけではだめだと考えたから、思い切って最初の方針をやめて、研究の範囲をぐっ

24) 同上、82-86頁。

と縮めてみたのです。昔から立派な国がさかんになったり、滅びたりする。そのときかならず大きな戦争がある。その戦史を徹底的に学べば、海防に関する訓戒がこもっているに間違いはない、そいつを十分納得ゆくように調べぬこうと考えたのですな。それが僕の第二段の研究だった。それをやってみると、そりゃいくつかのはっきりしない戦訓めいたものは浮かぶけれど、さてそれでどうなるというものでもない。まあ前の苦勞に新しい煩悶を重ねたのがオチかな。そうこうしているうちに、月日はぐんぐんたってゆく。イギリスへ来てからもう半年ですぜ。

つまり、初期の研究方法を諦め、広すぎる戦史研究の範囲を縮めて、ある強国の盛衰に関わる大きな戦争を集中的に調べて分析し、そこから海防の訓戒を引き出しておきたいという佐藤の考え方の変化が明白に分かるであろう。だが、この第二段の研究方針も新たな難題にぶつかり、適切に整理して説明できない戦訓が出てきたことで、佐藤の苦悶が大きくなったのである。海防研究の使命を帯びた佐藤は、ロンドンに着いて半年が経ち、まだ適切な研究方針が見つからないため、相当に焦っていたのである。このような苦悩のなかで佐藤は、絶え間なく模索して深く考えた結果、ようやく自己の研究方針を見つけて、それを確立させた。

そのうち、ふっと思いついたのだな。それは何か問題を一つ作って、それに当てはまる先例を集めてみる。その先例が成功したか失敗したかをざっと書き出してみたのですね。その共通点を調べているうち、急にパッと光が射し込んできたような気がした。これだと思ったね！これでいけばいいのだとわかったら、はじめて僕の研究の方針も定まったという次第です。

いよいよやり方が分かったから、しめたとばかりぐんぐん調べを進めてみた。進めてみると、その結果はきっとこれに間違いはないという僕の判断とぴったり合致するじゃありませんか。今までは海防問題にいろいろ疑問をもっていたんだが、この原則が見当つくと、その疑問はきれいさっぱり朝霧のように消えていった。じつに嬉しかった。

佐藤の研究方針については、言い換えれば、まずある重要な問題を提起して、後はさまざまな戦史のなかから、この問題に関連する成功あるいは失敗の先例をできる限り選んで分析して、そして異なる先例の共通点を引き出すことができれば、この問題の重要性が明らかになり、さらに戦争の勝利か敗北かにつながっていく注意点も自然にできるにちがいないということである。秋山の理解からすれば、佐藤の研究方針に対して「兵学の原則の手掛りをえられたのですな。わしも同感です。成功したか失敗したか、実例は千差万様だろうが、よくみると、きっと何か一つの公理が前後の連関をもってあらわれる。どうにも疑いえない原則ですか」という秋山の返答があったのである。佐藤にとって、研究方針が確立されたため、彼の研究作業がすばやく進んでいたのである。また、これにともなって、その時まで積み重なっていた多くの疑問も徐々に消えていたのである。

こうした佐藤と秋山との懇談が示すように、佐藤は短い留学期間を大切にしながら、一生懸命に西洋とくにイギリスの海防思想を勉強し、複雑な模索を経て、かろうじて適切な研究方針を見つけることができた。佐藤は、山本権兵衛から受けた使命を帯びて、当時、先進的な西洋の海洋国防理論をよく学ん

で、さらにそれを利用して、日本国防における海軍の重要性を強調して「海主陸従」の国防体系を作り上げようとしたのである。だから、この留学体験も佐藤の海洋国防思想の研究人生において、彼が西洋の海防理論と結んで日本なりの海防理論を完成するために非常に重要な年月であったと思われる。

そして、明治34（1901）年1月に佐藤は英国駐在を終えて、米国駐在の命令を受け、約8ヶ月の駐在調査を行い、10月に帰朝の命令を受けてアメリカから日本に帰国した²⁵⁾。佐藤が、アメリカでマハン大佐に会えなかったにもかかわらず、シーパワー思想の提起者だと呼ばれるマハン及び彼の大海軍イデオロギーから受ける影響は間違いなく前より深かったであろうと想像できる。ここまで述べてきたように、佐藤が内命を受けて、日本の状況にかなう海軍中心思想を完成するためにイギリスとアメリカに行き、西洋の海軍や海防を調査しながら、自分なりの研究方針を模索していた過程を簡単にまとめた。

三、在外研究のまとめ——『帝国国防論』

明治34（1901）年12月に帰国した佐藤は、翌年の1月、海軍大学校教官となった。そして、山本海相は佐藤に海外での研究成果をまとめて出版させた。佐藤の整理作業も相当に速く、彼の研究成果は明治35（1902）年3月1日に印刷されて、11月5日に水交社印刷所から出版された。これは即ち『帝国国防論』の完成過程である。また興味深いのは、10月28日に山本海相はわざわざ佐藤の『帝国国防論』を明治天皇に献上したことである。以下は山本の奏文の一部である²⁶⁾。

「臣竊ニ恐ル近キ将来ニ於テ和平ヲ攪擾スベキ禍機ヲ包蔵スルハ蓋シ清韓兩國ニ在ラムコトヲ恭シク惟ミルニ、帝国ノ海軍ハ今日雄ヲ東洋ニ称スルニ足ルベキモ、列強ノ軍備ハ駸々トシテ進ミ、殊ニ隣強ハ新ニ其海軍ヲ拡張シ、期年ナラズシテ帝国ニ倍蓰スルノ艤艦ヲ東洋ニ泛ベムトスルノ計畫アリ、若シ夫レ一朝風雨ノ警達セバ、環海ノ島帝国ハ果シテ枕ヲ高フスルコトヲ得ベキ乎、一念此ニ到レバ転タ寒心ニ堪ヘザルモノアリ、是ヲ以テ陰雨セザルノ綢繆ハ当今ノ急務ニシテ、国家ガ施設ヲ要スベキノ事業ハ頗ル夥多ナリト雖モ、海軍ノ経営ニ向テハ、就中最大力ヲ傾注セザル可ラザルヲ信ズ……天恩萬一ニ奉答セムコトヲ期セリ、茲ニ頃者僚属ヲシテ、国防ノ理義ヲ査覆シ、之ヲ古今ノ歴史ニ鑑ミ、帝国国防論一篇ヲ草セシム、体例文辞固ヨリ鹵莽簡劣ヲ免ガレスト雖モ、敢テ之ヲ闕下ニ契呈ス。」

もちろん、奏文での「僚属」は佐藤鐵太郎のことを指している。そのうえ、奏文を一見して、山本は日清戦争後、日本のまわりに存在している危機を指摘して、清国と韓国をアジア平和の脅威と見なしたのである。日清戦争後、清国政府は、北洋海軍を再建する計画を立て、光緒21（1895）年から25（1899）年までイギリスとドイツから11隻の艦艇を購入して、日清戦争前の北洋艦隊の水準には達しないが、一

25) 前掲『日本海軍史』第九卷（将官履歴 上）、244頁。

26) 山本伯伝記編纂会編『伯爵山本権兵衛伝・巻上』原書房、1968年、506頁。

定の規模を持ったのである²⁷⁾。その後、南洋海軍も古い艦艇を捨てて、経費を節約して、新式艦艇を更新し続けた²⁸⁾。だから、「隣強ハ新ニ其海軍ヲ拡張シ」ということは、清国の北洋海軍と南洋海軍の再建や更新を指しているだろう。しかし、この時期、庚子拳乱（1900-1901年）を経たばかりの清国は、国が滅びるほどの戦乱をようやく終えて、国内の安定を回復するための手立てに関心を集中していた。その間に、周辺や他国のことを顧みる余裕がなく、日本及びその強大な海軍に対抗できるのかについて、大きな疑問が残された。また、韓国は、自立さえもできなかつたため、日本に対する直接的な脅威はなかつたと言わなければならない。

だから、山本海相が、清国海軍の拡張とか、清韓が「包蔵」する「禍機」とかというような言葉を使ったのは、周辺環境に敏感になりすぎて、隣邦からの脅威を明治天皇への奏文で大きめに宣伝してしまったのである。いわば、山本は、日本が周辺から受ける脅威の雰囲気盛り上げて、そのうえで「隣強」の海軍の拡張に対抗して、未然に防ぐために、日本も海防に力を傾くべきだというロジックを使用し、明治天皇の心を動かして、海軍偏重の国防体系を建設する最終目的へと導きたかつたのである。

だから、山本の内命によって佐藤は「島帝国の国防は海軍を主とせざる可らざる所以」²⁹⁾を展開して論述したのである。その上、山本の以上のような考えを考慮してみれば、佐藤が完成した『帝国国防論』は、山本の謀略の一環であるに違いないと指摘できるのである。

ここまで述べてきたように、明治の建軍以来の陸海論争のなかで、海軍の立場に立つ佐藤は、海軍軍務局長山本権兵衛に目をかけられて、山本の内命を受けて西洋へ留学し、そして帰国してすぐに海外での研究成果をまとめて『帝国国防論』を出版し、さらに山本による明治天皇への進上に協力してしまったのである。

四、海軍中心主義——海主陸従の国防体系

佐藤が『帝国国防論』を通じて目指した主要な目標は、イギリスのような海軍中心の国防体系の確立である。具体的に言えば、まず攻勢戦略と守勢戦略において、海軍による制海権の重要性の提起である。

攻勢ニ就キ之ヲ論ズレバ、我陸軍ヲ海外ニ加フルノ必要ニ際シテハ必ず先ヅ其対手国ノ海軍ヲ撃破スルニ足ルベキ艦隊ヲ備へ、我陸軍ヲ洋外ニ出ヅノ道ヲ講ジ而シテ後始メテ之ヲ用フルコトヲ得ベク。守勢ニ就テ之ヲ論ズレバ、必ずシモ対手国ノ陸軍ト拮抗スルヲ要セズ、敵ヲシテ其ノ兵力ヲ輸送シテ我国土ニ上陸セシメンガ為ニ必要ナル海軍ノ軍備ニ対シ之ヲ撃破スルヲ以テ足レリト爲スベシ。之ヲ約言スレバ、我陸軍ヲ海外ニ用ヒンガ為メニハ必ず先ヅ海上ヲ管制シ得ベキ海軍ヲ備へ、敵ノ陸軍ヲ我国土ニ受ケザランガ為ニハ必ず先ヅ海上ヲ制シ敵ヲシテ輸送ヲ試ムルコト能ハザラシ

27) 海軍司令部『近代中国海軍』編集部編著『近代中国海軍』海潮出版社、1994年、623-624頁。

28) 姜鳴『龙旗飄揚の艦隊・甲午増補本』三联书店、2014年、464頁。

29) 前掲『山本権兵衛と海軍』、133頁。

ムルヲ要ス是レ軍備ノ完整ニ於テ特ニ留意セザルベカラザル所ナリ³⁰⁾。

ここでの佐藤の論述によれば、敵に向かう場合、攻勢戦略にしても守勢戦略にしても、日本にとって対外戦争が起こる場合に一番重要なのは、海軍艦隊の完備および制海権の掌握である。したがって、戦争の勝敗のかぎは、日本海軍の手に握られていると言わなければならない。佐藤がこのように海軍の働きをとくに強調するのは、彼が婉曲に対外戦争で日本陸軍の重要性を下げる意味も含まれていると理解できるのではなかろうか。

そのほか、佐藤は、日清戦争などの実例と結びつけ、陸軍の輸送よりも海軍による制海権の重視を強調している。

海ヲ制セズシテ海国ノ征服ヲ企テントスルハ無算ノ太甚キモノナリ、故ニ海戦ニ於テ勝利ヲ得ベキ軍備充実シ、其ノ応用ヲ誤ラザルトキハ他ノ防御設備嚴重ナラザルモ猶ホ能ク其ノ国防ヲ全フスルコトヲ得ベシ……海国ニ於ケル作戦ト海権トノ関係ヲ按ズルニトシテ海権ヲ有スルニアラザレバ善良ナル効果ヲ奏スルコト能ハザル……（ギリシア、ローマ、日清戦争、米国の独立戦争の結果は）海権ノ海国作戦ノ運命ヲ左右スル所以ヲ証明セザルハナシ……我帝国ニシテ東洋ヲ管制スルノ威力アラン歟敵軍ノ来撃毫モ憂ルニ足ラズ、然リト雖モ海上権力敵ノ管制スル所トナラン歟百万ノ帯甲ヲ擁スルモ竟ニ国防ノ実ヲ拳グルコト能ハザル…史例ノ示ス所ニ依リ海上ヲ制スルニ先ヅ其ノ陸軍ヲ輸送シタル前例ヲ調査スルニ、一トシテ其ノ危険ナルヲ称セザルナク³¹⁾。

海上ヲ制スルニ先ヅ其ノ陸軍ヲ輸送セント欲スルハ無算ノ太甚キモノト謂フベシ、苟モ兵ヲ外邦ニ用ント欲セバ必ず先ヅ敵ノ海上ヲ廓清スベシ、仮令我海軍ノ力敵軍ニ優レリトスルモ妄ニ陸軍ヲ護衛シ海上ニ出ツベカラズ、先ヅ敵ノ艦隊ヲ探リ得テ之ヲ撃破シ以テ海上ヲ掃蕩シ而シテ後徐ロニ之ヲ輸送スルヲ以テ原則トナスベシ³²⁾。

という分析である。佐藤は、もし海国が外国へ出兵しようとするれば、敵の海上艦隊を破ってから陸軍の輸送が始まるという順序を守るのが原則であると詳説している。歴史上の戦役にさかのぼると、優勢な海軍によって制海権をとるまえに、大陸に陸軍を輸送しようとする行為は、危険性を免れる戦例とはならなかったのである。これは簡単に理解できるように、もし敵軍が強い海上での実力を持っていれば、我が陸軍の輸送の途中で敵の海軍に襲われ全滅させられる可能性はとても高い。その一方で、もし敵の優勢な海軍に対抗する強大な海軍がなくて、制海権を敵にゆずれば、我が方は何百万の陸軍があっても、国の独立と安全を守ることはできない。そのために、何より肝心な任務は、我が海軍によって、先ず敵の海軍を潰して周りの制海権を我が軍が握ることである。さらに、これを実現する手段は、海防思想を強化して優勢な海軍の養成に力を注ぐこと以外にはないということである。

30) 佐藤鐵太郎『帝国国防論』水交社、1902年、19頁。

31) 同上、124-125頁。

32) 同上、129-130頁。

五、影響

佐藤が『帝国国防論』を通して提出した最も重要な国防の観点は、イギリスを模範として日本海軍を中心とする国防体系を作り上げようとしたことである。彼のこのような考えと論説は、防守すなわち自衛の立場に立ちながら、当時の陸主海従の国防体系に挑戦して、さらに陸軍の対外侵略の大陸政策に「国歩ノ寸進ヲ思フテ其ノ尺退ヲ知ラザルハ千古ノ通患」³³⁾ だという皮肉な批判を与えた。佐藤は、さまざまな方面から海主陸従の国防体系の必要性和重要性を説得力のある根拠に基づいて論述したのである。彼自身の回顧によれば、『帝国国防論』は、当時の国会議員にも広く配布され、「相当に強い影響を生じた」と語るほどの反響をもたらした。そのうえ、海軍大学校の同期の鈴木貫太郎海軍大将の回顧によれば、山県有朋陸軍元帥は、一読してその内容に立腹したという³⁴⁾。だから、当時の山本権兵衛海相は「此帝国国防論は島帝国の国防は海軍を主とせざる可らざる所以を論述せるものなり、而して由来我国防は中世以降陸主海従の風を馴致するや久しきものありしが、此帝国国防論の発表せらるるや海主陸従の輿論勃興するに至れり」³⁵⁾ と高く評価したのである。この観点からみれば、『帝国国防論』は、当時の陸海軍と社会に大きな影響と刺激を与えたといえるであろう。そして、佐藤が明治25（1892）年に完成した『国防私説』は、彼の海防思想の発端とすれば、この『帝国国防論』は、彼の海防思想が正式的に登場したと言うべき作品である。なぜかという、佐藤が完成した国防論は、シーパワー思想の大家であるマハンの理論を日本海軍の独自の国防論として再構成するという特色ある試みであり、この点では日本海軍への影響力は甚大であった³⁶⁾。

しかしながら、国家国防は防守自衛であるという佐藤の『帝国国防論』の論旨は、敵を一歩も国内に入れず、帝国および領土間の交通と海上における諸事業を保護することを中心に置いている。有事に戦勝を獲得するため、制海権の獲得に関する軍備を第一とし、朝鮮半島・大陸への進出を否定して、陸軍を海軍の補完的任務を遂行する地上移動軍へ改編する。制海権を獲得するため、敵の領海において敵艦隊を撃滅する。この思想は、朝鮮半島・大陸への進出を否定して「北守」の第一線を海上に置き、陸軍を海軍の補完的機関としたことにより、陸軍を否定するに等しく、非現実的な提言であった。当時の大勢は国防の第一線を朝鮮半島に置き、清国と朝鮮半島・大陸で戦い、来るべき露国との衝突に備えて臥薪嘗胆、軍備を拡張している最中であった。したがって、陸軍が猛反発するのは当然であるが、海軍においても彼の思想全てを肯定するものではなく、とくに大陸権益獲得の否定を海軍は支持するものではなかったのである³⁷⁾。

海軍が大陸権益の獲得を肯定していたことは、山本海相が『帝国国防論』を上呈した同月に閣議に提出した「海軍拡張ノ議」の中に見られる。この中で山本海相は、露国が清韓二国に勢力を扶植し、「終二

33) 同上、5頁。

34) 石川泰志 前掲『佐藤鐵太郎海軍中将伝』、124頁。

35) 故伯爵山本海軍大将傳記編纂会編 前掲『伯爵山本権兵衛傳』、507頁。

36) 波多野澄雄『日本海軍と南進』、清水元 編『両大戦間日本・東南アジア関係の諸相』アジア経済研究所、1986年、209頁。

37) 黒野耐 前掲『帝国国防方針の研究——陸海軍国防思想の展開と特徴』、38-39頁。

清韓両国ニ於ケル我權利ト利益トヲ危害セン是ニ於テ我ハ其權利ヲ主張シ其利益ヲ保護センカ為メ勢ヒ彼ニ反抗セサルヲ得サルヘシ」との認識を示した。そして、この時の日本の実力が不十分な場合、幸いに平和を維持できたとしても、「隣邦ニ於ケル我が利源ハ涸涸シ我が事業モ亦半途ニシテ沮喪スル」ことになるので、日本の利権を確保するために「海軍ノ拡張ヲ規画セントスル」との考えを示していた³⁸⁾。この考え方は、清韓二国における日本の利権を確保するため、露国との衝突を予測して、海軍の拡張を主張しており、朝鮮半島・大陸への進出を肯定する点において、佐藤鐵太郎の『帝国国防論』の主たる思想とは明らかに異なっていると言わなければならない。

おわりに

以上に述べたように、佐藤鐵太郎は、海軍軍人の立場に立って、山本権兵衛海相の内命を受けて、西洋の海防理論を勉強し、それを活かして日本なりの「海主陸従」の国防理論を作り上げたのである。その影響をみると、山本海相が、佐藤に海防理論を研究させたことは十分な効果を上げたと言えるであろう。しかし、佐藤の国防理念は、あくまでも一部だけ、日本の国防方針と海軍戦略のなかで実践されただけであった。その主たる原因は、攻勢理念と守勢理念の差である。すなわち、佐藤は、守勢国防の理念から出発したため、防守自衛の国防理論を完成したが、それに反して、陸軍は、攻勢国防の理念から出発したので、国家安全を実現するために、先ず国防圏を広げる必要があると考え、いわゆる生命線を朝鮮半島に置き、利益線を中国の東北に置く山縣有朋の考えである。これに加えて、近代の数多くの日本人は、海島国家から大陸国家になる夢をもちながら、佐藤の防守自衛の理念よりも自然と陸軍の大陸政策を支持しやすくなっていたのである。海軍内部も、佐藤の海主陸従の大海軍計画に共鳴しながら、陸軍の大陸への進出を是認していた。山本権兵衛海相も、満韓での権益に注視し、ロシアとの衝突を予測して、ロシア海軍に対抗できるような海軍に拡張しようとしていた。このような海軍拡張及びその目的は、ある意味では、佐藤鐵太郎『帝国国防論』の防守自衛の思想と相違していると言わねばならない。実際に、日本海軍の拡張と大陸権益の維持という現実的な環境は、佐藤の国防思想の実施と実現をいっそう困難にした。この点、すなわち、中国大陸の情勢の変動および日中関係の変化は、佐藤の国防思想を、すばらしい理想と度重なる現実的困難とのジレンマに陥らせてしまったのである。

38) 山本伯伝記編纂会編『伯爵山本権兵衛伝・巻上』原書房、1968年、512-513頁。